

太平洋における成長段階別の回遊様式の把握

緒言

ブリは我が国沿岸の大型定置網における重要対象種であることから、その回遊について古くから関心が持たれ、樹脂製や金属製の外部標識を用いた放流調査が盛んに行われてきた(山本ほか, 2007)。このような標識放流調査と漁場の季節的移動や体長測定等によって、太平洋側におけるブリの回遊様式の概要が推定されている(浅見他, 1967; 三谷, 1960; Okata, 1976; 田中, 1972a; 1972b; 1975)。すなわち、未成魚は、相模湾以南では大きな回遊を行わないが、東北と外房の間では夏に北上・冬に南下するという季節的南北移動を行う。また、成魚は産卵のために東北から九州までの南北回遊を行う。さらに、このような成魚の回遊様式は年代によって変化する可能性が指摘され、1920-30年代では東北から熊野灘までおよび熊野灘から四国・九州までの回遊群が、1960年代では東北から相模湾までおよび相模湾から四国・九州への回遊へと変化したとされた(田中, 1973)。また、各地において回遊を行わない根付き群が存在するといわれている(栗田, 1961; 三谷, 1960)。

これまで用いられてきた一般的な標識で得られる回遊に関する情報は、放流と再捕の位置と日付のみである。したがって、放流から再捕までの実際の回遊経路は不明であった。近年、照度・水深・水温データが日付および時刻とともに内部メモリに蓄積されるアーカイバルタグを用いた研究により、日本海側におけるブリの回遊の詳細が明らかにされた(井野ほか, 2006)。太平洋側でも同様の調査による近年のブリの回遊様式の解明が求められている。

2006年度から2008年度までの3年間、水研センタープロジェクト研究「日本周辺海域におけるブリの回遊と海洋環境の関係解明に基づく来遊量予測手法開発」が行われ、太平洋側においては中央水産研究所、三重県科学技術振興センター水産研究部(現三重県水産研究所)、高知県水産試験場、宮崎県水産試験場の共同によって、太平洋側各地においてアーカイバルタグの装着と放流を行った。これに先駆け、2004年3月から2006年1月において中央水産研究所と三重県科学技術振興センター水産研究部は、熊野灘におけるブリへのアーカイバルタグ装着放流を行った。また、このプロジェクト研究終了後の2009年4月にも、前記プロジェクト研究参画機関により、それまでに回収されたタグを再利用して相模湾において放流を行った。この報告の執筆後にもタグの回収が予想されるが、ここでは2009年4月までの再捕結果を取りまとめ、アーカイバルタグ装着魚の放流と再捕によって明らかにされた太平洋におけるブリの成長段階別の回遊様式について述べる。

(阪地英男)